

# 多発血管炎性肉芽腫症(ウェゲナー肉芽腫症)の 治療中に発症したサイトメガロウイルス感染症の1例

岸部 幹      高原 幹      國部 勇  
片田 彰博      林 達哉      原 遡 保明

旭川医科大学 医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

多発血管炎性肉芽腫症(ウェゲナー肉芽腫症)はステロイドとサイクロフォスファミドなどの免疫抑制剤の治療により劇的に予後が改善した。しかし、治療薬の副作用により易感染状態となり、時に重篤な日和見感染を引き起こす。今回我々は、多発血管炎性肉芽腫症の治療中に重篤なサイトメガロウイルス感染症を引き起こした症例を経験したので報告する。症例は66歳、女性。2011年3月1日より喘鳴を伴う呼吸苦が出現し、3月7日当科を再診した。喉頭ファイバーにて声帯麻痺はなく、声門下にファイバーを挿入すると気管狭窄を認めた。頸部造影CTにて両側の傍気管に膿瘍様の低吸収域を認め、入院の上、外切開により排膿、傍気管組織生検、気管切開を行った。生検の結果は非特異的肉芽腫性炎症との結果であった。血液検査にて、PR3-ANCAが16.5U/mlと高値であった。多発血管炎性肉芽腫症として、プレドニゾロン(PSL)50mg、サイクロフォスファミド(CPA)50mgより治療を開始した。治療開始後、傍気管の炎症性腫瘍は消失し、PSLを25mgまで漸減し4月16日に退院とし、外来にて加療した。5月11日から全身倦怠感を認め5月17日に再診した。血液検査にて肝機能障害を認め、肝庇護薬等を処方した。その後腹痛も加わり、5月23日に再診した。腹部CTにて虫垂腫大を認め、虫垂炎疑いにて緊急手術となった。しかし、術後も肝機能を含めた全身状態が悪化し、5月27日の肺単純写にて間質性肺炎を認め、血液検査にてサイトメガロウイルス抗原が検出された。ガンシクロビル、免疫グロブリンが投与されたが、肺炎は悪化し、6月4日に肺胞出血を起こし人工呼吸器管理となった。以後、全身状態は徐々に軽快し8月18日退院となった。文献的考察も加え報告する。